

# 21世紀の承認政治

加藤 朗

## Recognitive Politics in 21st Century

KATO, Akira

Obirin University, *Obirin Review of International Studies*, No. 18, 2006

桜美林大学『国際学レビュー』第18号（2006年）

## Summary

David Easton defines politics as “authoritative allocation of values”. Politics are divided into distributive politics and recognitive ones. Distributive politics is based on welfare value which can be distributed and divided like money, natural resources and food and so forth. Recognitive politics is based on deference value which can be neither distributed nor divided like nationalism, ideology, religion and so forth. The welfare value has its root deep in desires of human beings to live physically. Meanwhile, the deference value has the deep feelings of human beings to live mentally. While distributive politics is based on desires, the recognitive are based on emotions. Although these politics do not exist separately, they do together in one political process.

It depends historically which politics are more influential. Roughly speaking, recognitive politics are characteristic to ancient times and the medieval period under strong influence of religions. The origins of recognitive politics is Plato, who thought emotions more important than desires to politics. In the Renaissance, Machiavelli thought desires as much more important than emotions to politics. The modern period, the door of which Hobbes opened in terms of politics, is characterized by distributive politics because it is secularized. Recognitive politics returned to the present post-modern period in the 21st century because of a revitalization of religions like Islam.

\* \* \*

## 序 章 承認政治とは何か

### 第1節 配分価値と承認価値

政治とはデービッド・イーストンの言葉を借りるなら「価値の権威的配分」である<sup>1)</sup>。では、この「価値」とは何を意味するのだろうか。

価値について、篠原・永井はこう記している。「人間は、生きるために、生存の手段的価値（生活の糧）を必要とし、また、生きがい（生きることの意味づけ）を求める。前者の欲求の対象を福祉価値（welfare value）とよぶ。安全・富・技能・健康などはその代表的な価値であり、そのシステムが利益体系（interest system）である。後者の欲求の対象となる価値は、名誉価値（deference value）と呼ばれる。権力・地位・愛情・徳義などはその例であり多くの文化（culture）では信条体系（belief system）として一つの型を持っている」<sup>2)</sup>。つまり「希少価値」の「価値」には利益体系を構成する福祉価値と信条体系を構成する名誉価値がある。フランシス・フクヤマの言葉を借りるなら、前者を求める人間の感情が欲望であり、後者が気概である<sup>3)</sup>。つまり、自己保存や快楽追求などの人間の本能に基づく欲望を原動力とする福祉価値の権威的配分および道徳や倫理など人間の精神に基づく気概を原動力とする名誉価値の権威的配分が政治である。

前者の「生存の手段的価値（生活の糧）」とは、一言で言うなら、人間の身体に関わる価値である。具体的には、人間の生物的生存や国家の物理的存立を維持する食糧、農産物、天然資源そして外界の脅威から人間の身体的安全や国家の物理的安全を保障する警察力、軍事力などである。これらは具体的な数や量に置き換えて計量化することができ、物理的に配分可能<sup>4)</sup>な物質的な財である。その意味で福祉価値は配分価値ともいえる。この配分価値の配分をめぐる行われる政治が配分政治（distributive politics）である<sup>5)</sup>。より具体的には配分政治とは配分価値を誰が、誰に、どのように配分するか、という政治過程である。配分する力を持つのは誰なのか、一体なぜそのような力を持つのか。また配分を受けるのは誰なのか。さらにどのように配分するのか。配分の方法は正しいか、すなわち配分的正義（distributive justice）にかなっているか否か。配分政治ではこれらの問題をめぐって有史以来さまざまな論争が繰り広げられてきた。

他方、後者の名誉価値すなわち「生きがい（生きることの意味づけ）」とは、一言で言うなら、人間の精神に関わる価値である。具体的には、人間の生物的生存や国家の物理的存立に意味を与える権力、地位、宗教、名誉、名声、

愛情、道德、倫理などの人間の心理や人格化された国家の精神である。したがって精神的な財である名誉価値は配分価値のように計量化して配分することはできない。たとえば名誉を配分（正確には贈与）するか否か、あるいは宗教、民族、人種など他者のアイデンティティを認めるか認めないかといった二者択一でしか名誉価値は配分できない。とはいえ実際には、名誉価値は等級や位階などで格差をつけることで配分価値のように扱われることが多い。たとえば王、貴族、武士、平民、奴隷などの身分を設けて権力に差をつけたり、位階によって聖職者や軍人に社会的な上下関係をつけたり、勲章に等級をつけて名誉を区別したり、地位や階級によって所得に格差を設けたり、贈与品の質や量で忠義や愛情を計ったりするなど、実際には名誉価値に数量的な格差を設けることで名誉価値を配分価値に換算し、配分価値同様に計量化し配分している。

富や安全など配分価値が個人の生物的生存や国家の物理的存続など個的な身体的問題であり自然状態における価値であるのとは対照的に、名誉価値は他者との関係すなわち社会状態においてのみ意味を持つ関係的な精神的価値である<sup>6)</sup>。権力、地位、宗教、名誉、名声、愛情、道德、倫理などの名誉価値はすべて他者との相対的關係つまり名誉価値を名誉価値として肯定的にであれ否定的にであれ、他者が承認してはじめて価値を持つ。その意味で名誉価値は承認価値といえることができる。この承認価値の承認をめぐる政治が承認政治（recognitive politics）である。より具体的には承認政治とは誰が、誰に、なぜ価値を承認するか、という政治過程である。承認する力を持つのは誰なのか、一体なぜそのような力を持つのか。また承認を受けるのは誰なのか。さらに、なぜ承認するのか。その承認は正しいか、すなわち承認的正義（recognitive justice）にかなっているのか否か。配分政治同様、承認政治でもこれらの問題をめぐって有史以来さまざまな論争が繰り広げられてきた。

このように配分価値と承認価値は、前者が人間の生物的存在、国家の物理的存立に関わる量的概念である一方、後者が人間や国家の心理的、精神的存立に関わる質的概念であり、両者はまったく異なる概念を持った価値である。たとえば紛争の原因をみても、量的概念である配分価値については希少性すなわち物質的財が不足していることが紛争の原因となるが、質的概念である承認価値については承認の有無すなわち他者の名誉やアイデンティティなどの精神的財を認めないことが紛争の原因となる。だから両価値を「権威的配分」の対象として配分の政治過程で同一に扱うことには無理がある。

とはいえ両政治がまったく別個に存在するわけではない。人間は生きるだ

けでは動物と同じであり、「生きがい」なしでは人として「生きること」はできない。だからといって、「生きること」なしに「生きがい」も求められない。その意味で「生きること」と「生きがい」は表裏一体の関係にある。だから「生きること」を支える配分政治と「生きがい」を与える承認政治もまた密接不可分な関係にある。配分政治、承認政治の視点からみれば、イーストンの「価値の権威的配分」においては「権威」がどのように承認されるかが承認政治の過程であり、「配分」が配分政治の過程と考えることができる。また「(福祉価値に基づく) 利益関心と (名誉価値に基づく) 価値志向が、人間行動に一定の方向づけを与え、社会形成の起動力となる」<sup>7)</sup> (括弧内引用者) との篠原・永井の政治過程の説明も、利益関心すなわち欲望に基づく配分政治と価値志向すなわち気概に基づく承認政治が相まって一般の政治体系を形成すると解釈できる。したがって政治とは何かを明らかにするには、まずは承認政治とは何か、また配分政治とは何かを個別に考察し、さらに両者の関係について考究しなければならない。

にもかかわらず、これまで配分政治と承認政治が個別に考察されたことも、とりわけ承認政治が深く論及されたこともなく、また両者の関係が詳細に論じられたこともあまりない。イーストンにしても篠原・永井にしても両政治を明確に区別した上で政治を論じたわけではない。政治学では多くの場合、「欲望」、「利益」、「希少性」などの配分政治の視点から政治一般が語られ、「気概」、「名誉」、「承認」などの承認政治は軽視されてきた。

## 第2節 配分政治と承認政治の混同

そもそも近代政治学の始祖のホッブズは配分価値と承認価値を明確に区別していた。まずは配分価値について、ホッブズはこう述べている。「もしふたりの者が同一の物を欲求し、それが同時に享受できないものであれば、彼らは敵となり、その目的〔主として自己保存であるがときには快樂のみ〕にいたる途上において、たがいに相手をほろぼすか、屈伏させようと努める」<sup>8)</sup>。他方、承認価値についてはこう記している。「……人間はだれしも自己評価と同じ高さの評価を仲間期待する。そして軽蔑とか過小評価とかどのようなしるしに出あっても、彼らに害を与え、また他の者にはこれを見せしめることによって、彼らからより大きな評価を引き出そうと努力する〔そしてそれは、双方をしずめる共通の権力がない場合には、たがいに相手を滅亡させるに十分なのである〕」<sup>9)</sup>。ホッブズは配分価値と承認価値を明確に区別し、共通の権力がない状況においては、両価値をめぐる紛争が起きると考えた

のである。

しかし、ホッブズの衣鉢を受け継ぐ現代政治学は個々の価値に基づく配分政治と承認政治を必ずしも明確には区別していない。前述のイーストンも価値には「精神的財・物質的財」の2つの「財」があることを認めてはいる<sup>10)</sup>が、この両価値を「価値の権威的配分」の政治体系の中で区別することなく配分的価値として扱い、必ずしも配分政治と承認政治を明確に分けてはいない。また篠原・永井も配分政治と承認政治を必ずしも峻別することなく、両政治を利益体系と信条体系として同一の政治過程の中で扱っている。

たしかに一般に、政治においては配分政治によってまず生存が確保され、その生存に意味を与えるために承認政治が行われることが多く、そのために配分政治が重視される傾向がある。事実ホッブズも、「死の恐怖」からの解放すなわち生物的生存の確保という配分的価値に基づく配分政治を優先している<sup>11)</sup>。そのためホッブズを始祖とする近代政治学でもホッブズ同様に配分政治が優先され、承認政治にあまり関心が向かなかったことは事実である。しかし、西洋の中世封建社会の騎士道や日本の武士道のように時に名誉のためには死を選ぶといった、承認価値を配分価値より重視し承認政治を重視する思想がなかったわけではない。それどころか宗教戦争こそ宗教という承認的価値をめぐる承認政治の典型である。配分政治、承認政治のいずれを優先するかは別にして、「自負は名声を求めて……侵略を行なわせる」とホッブズが指摘したように、承認をめぐっても人々は闘争するが故に、単に「希少性」だけに紛争の原因を還元する配分政治と承認政治とは同一視できない。

にもかかわらず、政治学や国際政治学の学徒の多くもまた配分政治と承認政治を明確には区別してはいない。それどころか、多くの政治学の学徒はもっぱらホッブズの「希少性」や「死の恐怖」を前提とする財物や安全の配分をめぐる配分政治に焦点を当て、後者の「名声」を求める承認政治にはこれまであまり関心を向けてこなかった。それにはいくつかの理由がある。

第1に、近代政治学の思想上の理由である。そもそも近代政治学はキリスト教の神中心の世界における神による人間の承認に基づく承認政治を否定し、人間中心世界における配分政治を肯定することから始まった。配分政治の思想の先駆者が力量（ヴィルトゥ *virtu*）を肯定したマキャベリであり、思想的基盤を築いたのがホッブズやロックである。配分政治の思想とは、フクヤマによれば、ホッブズやロックに始まるアングロ・サクソン流の自由と平等を求める自由主義思想である。自由主義思想がアダム・スミスによって経済分野で開花し、以後何よりも配分価値を増大し物質的に豊かに安全に生きるこ

とを目的とする配分政治が優先されたのである。その結果、ヘーゲルらの大陸系観念論に基づく気概に満ち名誉ある精神的に豊かな生き方を求める、つまり承認価値を重視する承認政治は次第に軽視されていった。

第2に、近代政治学の方法論上の理由である。近代政治学は主客二元論に立ち客観性を重視する自然科学の方法論を導入し、「科学化」を目指して自然現象を数字に還元する分析手法を取り入れる傾向が強かった。特にベーコン、ホッブズ、ロック、ヒュームなど英国系経験論に基づく政治学は大国の学問として発展し、やがて超大国となった米国で1960年代、70年代に科学化された政治学すなわち政治科学（political science）として隆盛を究めた。そのため近代政治学では数字に置き換え、計量化ができる配分価値に主に焦点が当てられるようになった。その一方で配分価値とはまったく対照的に承認価値は主観的で数字に置き換えることが難しく、「客観性」を重んじる現代の政治科学では軽視されることが多かった<sup>12)</sup>。また一部の承認価値は、前述したように等級や位階などの格差を設けることで数量化され、計量政治学などに取り込まれ配分政治として扱われた。

第3に、20世紀に入って政治なканずく国際政治の主要な課題が、2度の世界大戦による惨禍や冷戦時代の核兵器による人類絶滅の危機、自由主義経済の発展に伴う世界的な貧富の格差の拡大など、人類や国家の存続を脅かす戦争や人間の生物的生存を奪う絶対的貧困をいかに解決するかになった。つまり「生きがい」よりも、まずは「生きること」が政治の喫緊の課題であった。そのため承認政治よりも配分政治が重視された。また冷戦時代には資本主義と共産主義の両陣営が承認価値である自由主義思想と共産主義思想の優劣を、いずれが物質的に豊かな生活を保障できるかという配分的正義の優劣に還元したために、やはり配分政治が中心となった。

### 第3節 配分政治の終焉

しかし、配分政治は冷戦の終焉とともに終わりを告げようとしている。個人の能力に応じた自由配分を標榜する資本主義が平等配分を目指す計画経済に勝利し、配分の方法をめぐる闘いに決着がついた。今や価値の配分は地球大に拡大した市場メカニズムに委ねられており、配分政治が関与する余地は日に日に縮小している。また米ソが保有していた10万発もの核弾頭は1万発以下に減り、米ロが軍事的に対峙する危険性は著しく低下した。人類滅亡の「死の恐怖」から解放された多くの国で人々は「生きること」の配分価値だけでなく、「生きることの意味」を問う承認価値を求めるようになった。その

承認を求める闘争の典型が9.11の同時多発テロであろう。かつての共産主義のようにアルカイダは決して貧困な労働者階級の解放を目指しているのではない。彼らが正義と考える「イスラム」の実現すなわち非イスラム世界による「イスラム」の承認を求めてテロを実行している。

承認的正義の実現を求めているのはイスラム原理主義者だけではない。キリスト教、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教の原理主義者が承認を求めるテロを世界中で実行している。またソ連の崩壊、共産主義の破綻に伴い旧共産圏では承認価値の一つであるエスノ・ナショナリズムを求めて民族紛争が多発している。さらにアジア地域では中国、韓国が反日イデオロギーを梃子に自国の威信を高めようとし、他方日本は過去の歴史を肯定することで威信を取り戻そうとしている。

冷戦の終焉はフクヤマの言う「歴史の終焉」であり、「歴史の終焉」とはまさにホッブズの「欲求」や「死の恐怖」に基づく配分政治の時代の終わりである。それは同時に、長い間等閑視されてきたプラトンの「気概」やホッブズの「名声」などに基づく承認政治の復活を意味する。脱冷戦期が「新しい中世」の様相を呈している一つの理由は、この承認政治の復活にある。脱歴史の時代に入った21世紀は、人間や国家が「生きること」よりもむしろ「生きること」の意味すなわち「生きがい」を問う承認政治の時代と言ってよいだろう。

配分政治の終わりは政治学にも大きな影響を与えている。配分政治学とも言うべき近代政治学や国際政治学、なかでも「生きること」に焦点を当ててきた現実主義理論は9.11テロ、民族紛争や帝国の出現などの国際政治の破格現象を十分に説明できず、大きな壁に突き当たっている。ホッブズの国家を主体とする安全保障では、もはやテロという非国家主体による脅威から我々は安全ではいられない。他方、承認政治学はフランシス・フクヤマの『歴史の終焉』、そして彼を批判するサミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』によって再評価されつつある。しかし、これらの承認政治学はかつての宗教戦争の承認政治に似て、キリスト教対イスラム教、西洋対非西洋の対立を肯定しかねない危険性を孕んでいる。また1980年代に入って米国を中心にカルチュラル・スタディーズや差異の政治学などのアイデンティティ・ポリティクスに関心が集まっている。しかし、これらポスト・モダンの政治学は相対主義の罠に陥り、政治学や政治思想を解体はするが、新たな政治学は構築できないでいる。

歴史の終焉、自由主義の全球（グローバル）化とともに配分政治が衰退す



る一方、冷戦後再評価されてきた承認政治とはどのような政治なのか、また21世紀の承認政治の時代とは一体どのような時代なのか、承認政治にまつわるさまざまな問題を配分政治との比較を交えながら明らかにしようというのが、本稿の目的である。

## 第1章 承認政治の歴史的変遷

通常我々が言う政治には、承認政治と配分政治の2つの側面がある。いずれの政治が重視されるか、すなわち欲望か気概のいずれを重視するかは時代や状況によって異なる。ここでは承認政治の時代とは気概、配分政治の時代とは欲望が重視される時代のことを言う。

世界の歴史を振り返れば、最大の承認価値の一つである宗教と政治が一致していた祭政一致の古代社会、階級という名誉価値によって社会秩序が構成されていた階級制度の封建社会は承認政治、一方宗教という承認価値の政治介入を排除する政教分離、配分価値の公平な分配を理想とする民主主義の近代社会は配分政治が優位を占めた時代と言えるだろう。そして21世紀の脱近代社会は再び承認政治の時代になりつつある。それがはたして宗教の政治介入による祭政一致の古代社会や、実質的な階級社会の復活による中世封建社会への先祖帰りとなるのか、それともまったく新たな承認価値に基づく承認政治の社会となるのか。その手がかりをつかむために、本章ではまずプラトン、マキャベリを取り上げて承認政治と配分政治の立場がどのように逆転したかを、歴史的に概観することにする。

### 第1節 プラトンと承認政治

承認政治と配分政治を峻別し、承認政治を配分政治よりも優先したのはプラトンである。プラトンはソクラテスの口を通じて理想の政治、理想の国家について、その著『国家』で次のように語っている。人間の魂には3つの部分がある。「物を学ぶところの部分」すなわち「学びや知を愛する部分」、「気概にかられる部分」すなわち「勝利や名誉を愛する部分」そして「欲望的部分」すなわち「金銭、食物、性愛などを愛する部分」である。理知、気概、欲望の3種類に分けた魂に応じて、プラトンは人間を「知を愛する人」、「勝利を愛する人」、「利得を愛する人」に分類した<sup>13)</sup>。さらにプラトンはそれぞれの魂や人に応じて政治を3つの段階に分けた。「理知」に基づき「知を愛する人」が行う政治を最上位の政治とした。次に気概に基づき「名誉を愛する

人」が行う政治を第2位に位置づけた。そして欲望に基づき「利得を愛する人」が行う政治を最下位に置いたのである。第2位の気概に基づき名誉という承認価値を愛する政治が承認政治であり、また最下位の欲望に基づき利得という配分価値を愛する政治が配分政治である<sup>14)</sup>。このようにギリシア時代から承認政治は認識され、プラトンは承認政治を配分政治よりも上位に位置づけていた。

プラトンが承認政治と配分政治をまったく別個のものと考えていたのか、両政治の間に何らかの関連性を認めていたのかは定かではない。序章でも述べたように、元来「生きがい」を保証する承認政治と「生きること」を保証する配分政治は密接不可分の関係にある。人間は「生きがい」なしでは動物として生きることはできても人として「生きること」はできない。だからと言って、最低限動物として「生きること」なしに人としての「生きがい」も求められない。その意味で「生きがい」と「生きること」は表裏一体の関係にあり、したがって気概と欲望も紙の表裏の関係にあると言ってもよい。要は気概と欲望のいずれを重視するか、その倫理的な判断基準こそが承認政治と配分政治を区別する。この判断基準についての詳察は章をあらためて検討する。

倫理的な判断はひとまずおいて、「生きること」を保証する配分的価値の生産を他者に委ねることができれば、承認政治と配分政治は分離できる。たとえばギリシア、ローマ時代の奴隷制である。古代ギリシアのポリスでは貴族、平民、奴隷の身分に分かれ、もっぱら奴隷が食糧や衣服などの配分価値を生み出した。一方、奴隷が生み出す配分的価値の恩恵を受けた貴族や平民は名誉や名声などの承認価値を求めて政治や軍事に関わることができた。奴隷の生産する配分価値が貴族、平民に不満なく分配されている限り、また奴隷制による分配が倫理的に正当化されている限り、つまり「生きること」が保証されている限り承認政治と配分政治は分離可能である。

しかし、現実には承認政治と配分政治が完全に分離できたとは考えられない。なぜならいつもすべての貴族、平民が満足いくように配分価値が分配できるわけではない。たとえあり余るほどの配分価値があったとしても、貴族、平民の中にはより多くの配分価値を望む者もいただろうし、プラトンの対話篇『ゴルギアス』に登場するカリクレスのように強者の権利として多くの配分を自然の正義として肯定する者もいただろう。また多くの場合は、配分価値はすべての貴族、平民を満足させるほど十分には生産されなかったろう<sup>15)</sup>。その場合には限りある配分価値をめぐる「生きること」を求め欲望に基づ

く配分政治が行われたことは想像に難くない。さらに欲望が気概の源になる場合には、とりわけ承認政治と配分政治の分離は難しい。配分価値については貴族、平民などの階級や身分に応じてだけでなく、たとえば戦功や偉業に与えられた名誉に応じて報奨として金、食糧や衣服などの利得が配分された。つまり、より良い名誉や名声などの承認価値を得ることはより多くの配分価値を得ることに直結することも多かった。であればこそ、貴族や平民の中にはより高い身分や階級を目指したいとの欲望から気概を発揮した者も少なからずいたことだろう。

欲望が気概の源だからと言って、欲望が肯定され、配分価値の「利得」が承認価値の「名誉」とみなされたわけではない。マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で明らかにしたように、近代資本主義においてさえも「利得」は必ずしも「名誉」とはみなされなかった。「名誉」が結果的に「利得」を生むことはあっても、「利得」のために「名誉」を求めることは倫理的とはみなされなかった。後述するように気概によって欲望を抑制することが求められたのである。欲望が容易に気概に取って替わるが故に、プラトンは気概を欲望よりも優位に置く理想を語ったのかもしれない。

ギリシアの古代政治における人間中心的世界の人と人との相互承認に基づく承認政治は、ローマ時代を経て中世ヨーロッパのキリスト教の神中心的世界では、神による人の一方的承認すなわち人による神への全面的帰依に基づく承認政治に取って替わられた。しかし、人間相互であれ神と人との間であれ、承認政治の優位の時代は近代まで続いた<sup>16)</sup>。

## 第2節 マキャベリの配分政治への転換

長らく続いた承認政治の時代を配分政治の時代へと逆転させる契機を創り出したのは、配分政治優位の思想の淵源となったマキャベリである。マキャベリはプラトンは対照的に気概よりも欲望を優先させた。たとえば欲望について彼はこう述べている。「領土欲というものは、きわめて自然で、あたりまえの欲望である。したがって、能力のある者が領土を求めようとすれば、ほめられることはあっても、とがめだてられることはない」<sup>17)</sup>。あるいは名誉や名声といった承認価値についても、「一つの悪徳を行使しなくては、自国の存亡にかかわるという容易ならぬばあいには、汚名などかまわずに受けるがよい」<sup>18)</sup>と、名誉よりも自国の存亡を重視した。また承認価値よりも配分価値を重視することが人間、ことに君主にとっていかに重要かをこう述べてい

る。「……人の実際の生き方と人間いかに生きるべきかということは、はなはだかけ離れている。だから、人間いかに生きるべきかということのために、現に人の生きている実態を見落としてしまうような者は、自分を保持するどころか、あっというまに破滅を思い知らされるのが落ちである」<sup>19)</sup>。マキャベリは、君主は何よりも「生きること」すなわち配分価値を重視し、「いかに生きるべきか」といった承認価値にかかずらうべきではないとしたのである。このようにマキャベリは、プラトンが第2位に位置づけた気概に基づく承認政治と最下位に位置づけた欲望に基づく配分政治の順位を逆転させたのである。

だからと言ってマキャベリは気概を無視したわけではない。それどころか君主にとって気概が国家を獲得し、統治するにあたっていかに重要かを『君主論』や『政略論』では縷々述べている。プラトンにおける気概（テューモス）に相当する言葉はマキャベリではヴィルトゥである。このヴィルトゥという言葉はマキャベリは気概、力量、徳などさまざまな意味で用いており、一つの意味に統一することは難しい。会田雄次によれば、ヴィルトゥとは「人間に大事業を達成せしめるような、人間の根本的な性格を示すものである。ことばをかえれば、すべての人間行動がそこから起こる力とか活力をさす」<sup>20)</sup>。たとえある者が「領土欲」を持ったとしても、その者にヴィルトゥがなければ領土を獲得することはできない。マキャベリにとって「能力のある者」とはヴィルトゥを備えた人物のことである。欲望はヴィルトゥによって達成できるのである。つまりマキャベリは、初発の行動を惹起する源泉として欲望を認め、次にその欲望を実現する手段として気概であるヴィルトゥを置いたのである。このようにマキャベリは気概と欲望が表裏一体の関係にあることを認め、その上で欲望を気概よりも優位に置いたのである。この点でマキャベリの政治は、気概と欲望を分離し気概が欲望よりも優位に置かれていた古代ギリシア政治や中世封建政治時代とは異なり、まさに配分政治優位の近代政治の起点となったのである。

では欲望と気概の地位の逆転がルネサンス期にどのように起こったか、佐々木毅のヴィルトゥ論を参考に概観する。佐々木はルネサンス期の「徳 *virtus*」が、いかにしてマキャベリのヴィルトゥすなわち「『運命』に対抗して人間の自立的活動の領域を確立せしむる能力」と解釈されるようになったか、次のように考察している<sup>21)</sup>。

まずダンテでは「徳 *virtus*」は人間のみならず神およびすべての被造物に付与されていた。「人間の『徳』は情念の抑制、理性への服従を前提とする実

践能力であり、それには道徳性と幸福、更には自由が不可分に結合している。人間の『徳』は宇宙における人間の地位、能力に対応し、しかも神の秩序に完全に従属して」いる。ダンテでは神の手に委ねられているとみなされた「徳 *virtus*」は、次にペトラルカではより人間的なものとして彼自身の内面的葛藤を引き起こした。すなわち栄誉や名声といった承認的価値への情熱が沸き上がる一方で神への完全な献身が求められるという状況にペトラルカは内面的に分裂した。やがてペトラルカにおいてはダンテの神中心の世界観は破綻していった。そしてペトラルカを尊敬するサルターティは、人間は「何よりもその『徳 *virtus*』に基づきヘラクレス的な強靱さで不滅の創造を行うことが要求される。この活動性の強調から意志の知性に対する優位が帰結し、単に所与のものに埋没することなく『徳』に基づいて普段に作為することが要求される」<sup>22)</sup> とみなし、人間中心の世界観が肯定された。このようにダンテの神中心の世界観はペトラルカでは神中心と人間中心の2つの世界観に分裂し、サルターティではついに人間中心の世界観へと転倒していった。これはギリシアの人間中心世界のまさに再生（ルネサンス）であった。

サルターティの人間中心の世界観はやがて「人間存在全体を賛美し『ヒューマニスト』的人間尊厳論の絶頂を形成した」<sup>23)</sup> マネッティへと引き継がれた。人間の肉体を全面的に肯定し人間存在を賛美したマネッティの世界では、内的な分裂に陥ったペトラルカとは異なり、「現世の完全な肯定と神への献身とが何ら矛盾なく調和」<sup>24)</sup> したのである。しかし、この人間の世界の肯定は「欲望」と「徳」との対立を引き起こした。

サルターティの愛弟子ブラッチオーリニは『貪欲について』で、次のように両者の対立を描いている。まず「欲望」を賛美する者は、次のように語る。「そもそも全て偉大な行為は『貪欲』から発生し、支配者も学問研究者も、そして聖職者も金と利得とをその行動の原動力としている。この情念は人間にとって自然であり、人間はこれによって自己保存が可能となり、富は国家生活と人類の存続とを支える。そして国家の対外政策の原理は『公的貪欲』である。人間は全て『貪欲』であり、私益よりも公益を優先させることはあり得ないし、それがまた『現実』である」<sup>25)</sup>。これこそ、近代の配分政治の核心をつく言葉である。

しかし、ブラッチオーリニは欲望を認めたわけではない。彼は欲望を賛美する者に次のように反論する。「かかる情念への屈伏は『徳』の放棄であって神の最も憎悪する態度であり、自己自身の喪失と慢性的苦悩、不安が帰結する。そして自己の『貪欲』を唯一の行動原理とする限り、公共の利益は全く無視

され、国家 *res publica civitas* は崩壊し、彼は祖国に対する裏切り者となる。蓋し、かかる人間にとってはすべての正義が消滅し、貧者の抑圧と他人の搾取とが唯一の関心となり、国家の危機の下でも私益の貫徹を企てるだろう」<sup>26)</sup>。このようにブラッチオーリは「徳」を「欲望」よりも尊重し、理性的秩序を重んじたのである。これは、プラトンが理想とした国家論の再生に他ならない。つまり古代ギリシア以後続いた承認政治は、ダンテにみられる神中心的世界の神と人との承認政治を経て、再び古代ギリシアのように人間中心的世界の人と人との承認政治へと回帰したのである。

しかし、16世紀に入って「世俗化の昂進が新しい人間像とこの秩序（『徳』が常に情念の解放を阻止するような理性的秩序）の破壊とをもたらし、秩序自体がトータルに問われざるを得ない状況が出現した時」<sup>27)</sup>（括弧内引用者）、マキャベリの新たな政治理論すなわち承認政治と配分政治の逆転が生まれたのである。

マキャベリは、人間は身体的には動物と同じか、もしくは感覚においては動物にも劣る一方、精神的には「生来『野心』と『食欲』とを備え、そのため善と平和とは人間において完全に消滅している」と考えた。マキャベリの人間観においてはブラッチオーリの人間尊厳論にみられた「人間の自然的能力へのオプティミズムと理性的秩序への信仰」は完全に失われ、替わって「人間の生命をも『自己』の欲望のために手段化する情念の論理が貫徹」している。このような状況は、まさに「人間は人間に対して狼である」「万人の万人に対する闘争」となる。この新しい状況を最も端的に示すのが、『『ヒューマニスト』において理性的秩序のシンボルであった『徳』の欲望実現能力たる *virtu* への転化である」。こうして理性的秩序を支えてきた「徳」は「人間の特権たる *virtu*」となる。そして「徳」は「人間をいよいよ動物以下」にし、「野心」や「食欲」を充足するための手段となったのである<sup>28)</sup>。

ルネサンス初期にはヴィルトゥは神中心の世界では神の秩序に対応すると考えられ、やがて人間中心の世界では理性的秩序を支えと考えられた。そして16世紀に入って人間中心の世界観のさらなる世俗化が起こり、マキャベリはヴィルトゥを人間の欲望を実現する手段としたのである。そこではマキャベリは神が定めた「運命」（*フォルトゥーナ*）をヴィルトゥによって変えることができると考えたのである。これこそ神が主体の神中心的世界から人間が主体となる人間中心的世界への世界観のコペルニクス的転回である。

人間中心的世界で問題になったのは配分の問題である。これまでは神や名誉などの承認価値に基づいて配分されていた配分価値を分配する方法が問題

になった。というのも欲望とヴィルトゥに基づく配分価値の分配では、まさに佐々木が指摘するように、「万人の万人に対する闘争」という状況になるからである。この配分をめぐる新たな配分政治の問題に取り組んだのが、別の機会に章をあらためて検討するが、ホッブズである。マキャベリは古代ギリシア、中世キリスト教社会の承認政治を打破する一方、新たな近代の配分政治の問題を提起し、配分政治優位の近代政治の扉を開けたのである。

(本章終り、以下続く)

## 注

- 1) デービッド・イーストン著、山川雄巳訳『政治体系』ペリカン社、1976年、第5章を参照。
- 2) 篠原一・永井陽之助編『現代政治学入門』有斐閣双書、1975年、7-8頁。
- 3) フランシス・フクヤマ著、渡辺昇一訳『歴史の終わり』(上)(下)三笠書房、2005年。
- 4) たしかに軍事力や警察力は、兵士や警官の士気という量に還元できない質的要素を含んでいる。しかし、量に換算できる軍事力や警察力すなわち装備や人員の数が拮抗している場合に士気という精神的要素が重要になるのであって、通常は数量によって軍事力、警察力は測定可能である。したがって軍事力や警察力によって得られる安全は配分可能な価値である。
- 5) 配分価値が究極的に身体に関わることから、配分政治を身体政治と呼ぶこともできる。この文脈から精神に関わる承認政治を精神政治と名付けることもできる。
- 6) 他者との関係とはすなわち社会状態の存在である。この点でホッブズの議論は矛盾している。ホッブズは、自然状態は戦争状態であり、戦争状態には「勤労の占める場所はなく、したがって……社会」(永井道雄責任編集『ホッブズ』中公バックス『世界の名著』28、1979年、157頁)もない、と言う。「そして何よりも悪いことに、絶えざる恐怖と、暴力による死の危険がある。そこでは人間の生活は孤独で貧しく、きたならしく、残忍で、しかも短い」。その一方でホッブズは人間の本性として、競争、不信、自負の3つを挙げ、競争は獲物を得るために、不信は安全を、そして自負は名声を求めて、いずれも侵略を行わせる(同上、156頁)と記している。前2者は純粋な上述のホッブズの自然状態を前提としても成り立つが、名声に値するという価値観を共有する他者の存在や他者からなる社会がなければ、自負も名声もない。ホッブズは名誉価値を紛争原因に持ち込んだことで、自然状態ではなく社会状態を暗黙の前提に置いたのである。このような自然状態と社会状態の混乱が起きたのは、ホッブズがイギリス内戦によって崩壊した社会を暗黙のうちに想定していたからであろう。つまり、ホッブズの自然状態とは承認政治から見れば無政府状況であって、無社会状況ではない。
- 7) 篠原・永井編、前掲書、8頁。
- 8) 永井責任編集、前掲書、155頁。
- 9) 同上、156頁。
- 10) イーストン、前掲書、142頁。
- 11) フクヤマは以下のように記し、中世の貴族階級による承認政治から近代のブルジョ

ア階級による配分政治への転換点をホッブズに求めている。「そこでホッブズは、古い貴族階級に取り引きを申し出た。つまり、モノが無限に手に入る平和な生活の見返りに、『気概』に満ちた誇りを売り払わないかと持ち掛けたのだ。」フクヤマ、前掲書（下）、37頁。

- 12) このことは、現代国際政治学の始祖の一人であるモーゲンソーが「力によって定義される利益の概念」（ハンス・モーゲンソー著、現代平和研究会訳『国際政治』福村出版、1993年、第1巻、4頁）を現実主義国際政治学の基本概念としたことによく現れている。もちろんモーゲンソーは「威信政策」を権力闘争の一つの発現形態として取り上げ、「威信への欲求が個人間の関係の本質的要素である」のと同様に、「威信政策が国家関係の本質的要素である」（同上、79頁）と承認価値を認めている。しかし、モーゲンソーの思いとは異なり、その後の国際政治学においては「威信政策」よりも数字に置き換えることのできる配分価値としての「力」によって定義される「利益」に関心が集中していった。
- 13) プラトン著、藤沢令夫訳『国家』（上）（下）、岩波文庫、2005年。引用は『国家』の章および段落番号に基づく。第9巻第7章、580D, 580E, 581A, B, C, D。
- 14) 同上、第9巻第8章、583A。
- 15) 配分政治が行われない状況には次の2つの場合が考えられる。まず、すべての共同体の成員に必要十分な配分価値が配分され、物理的に満足できる状況にある場合。実際には、いくら必要十分な配分価値があっても承認価値に基づく優越願望から心理的に満足することは難しい。次に、必要十分な配分価値はないが、共同体の成員が分配方法を正当と認める場合。たとえば、市場による分配が正当と認められれば政治による配分は不要となり、配分政治は行われない。
- 16) たしかにソクラテスやプラトンと同時代に生きたツキジデスの『戦史』を取り上げて、ギリシア時代の政治を配分政治から語ることが多い。しかし、それはツキジデスがペロポネソス戦争を取り上げているからである。戦争は「安全」という配分価値すなわち「生きること」に関わる配分政治である。またツキジデスの英訳をしたのが「名誉」という承認価値よりも「安全」という配分価値を重視したホッブズであり、配分政治の文脈からツキジデスを解釈したものと思われる。そのため、ギリシア時代も近代同様に配分政治優位の時代と誤解されてきたのである。『戦史』も承認政治の文脈で読み直せば、スパルタの勝利やアテネの敗北が「気概」の有無から解釈できるだろう。
- 17) 会田雄次責任編集『マキャベリ』中公バックス『世界の名著』24、1979年、56頁。
- 18) 同上、106頁。
- 19) 同上、105頁。
- 20) 同上、38頁。会田はヴィルトゥを「気概」や「力量」と訳出している。たとえば同上書所収『君主論』8章の会田訳を参照。
- 21) 佐々木毅『マキャベリの政治思想』岩波書店、1970年、71-81頁。
- 22) 同上、72-73頁。
- 23) 同上、73頁。
- 24) 同上、75頁。
- 25) 同上、76頁。
- 26) 同上、76頁。
- 27) 同上、78頁。
- 28) 同上、80頁。